

平成26年度

年報



屋久島森林生態系保全センター



目次

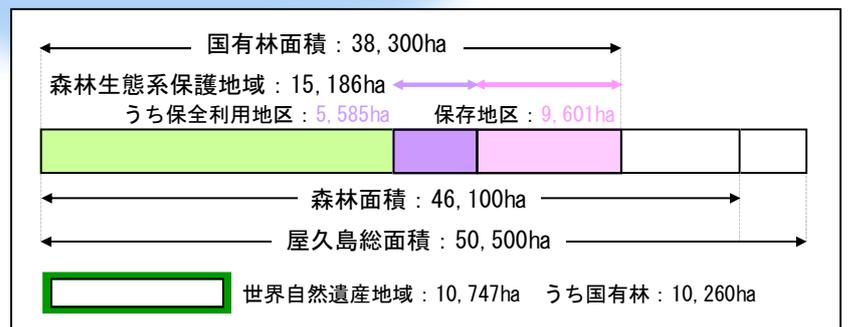
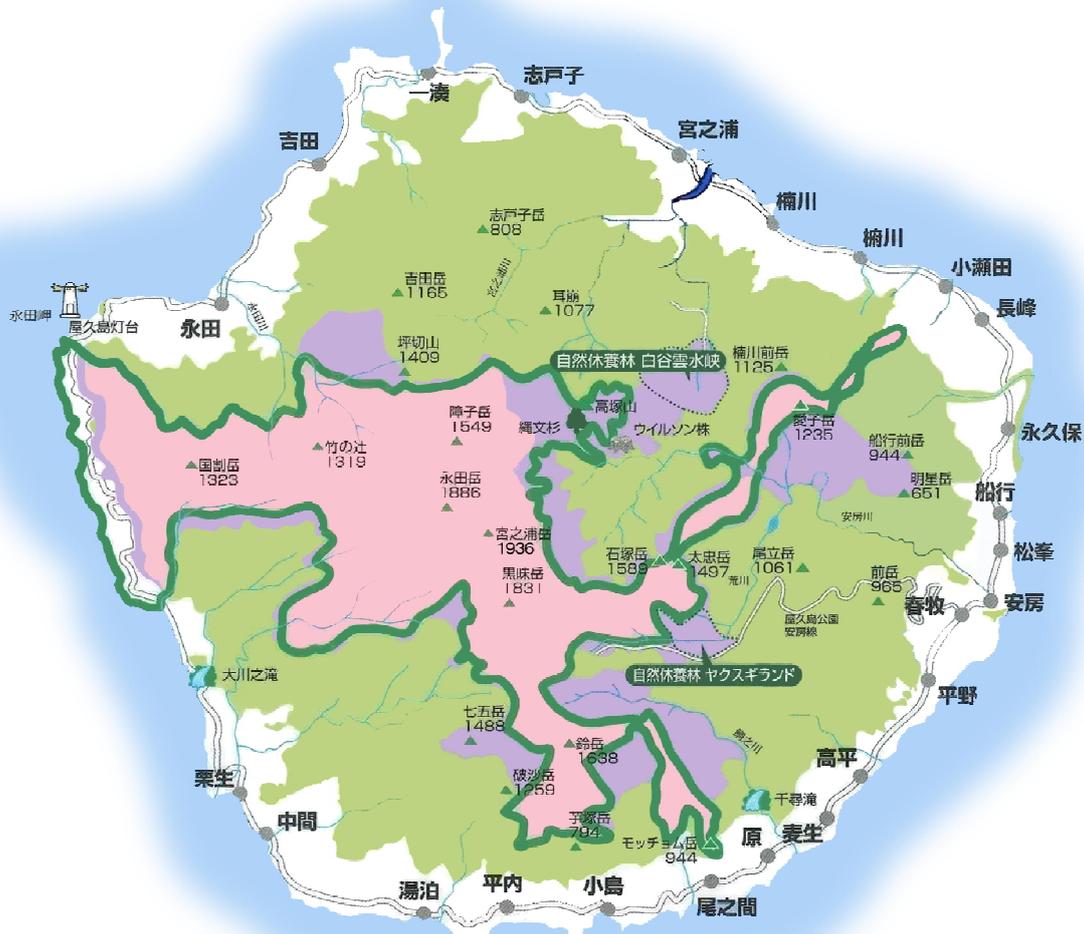


I. 概要	1
II. 森林生態系保護	
1. 地域連携推進等対策	
(1) 縄文杉周辺整備事業	2
(2) 天然生林管理水準確保対策事業（GSS）	3
2. 保護林等整備・保全対策	
(1) 著名屋久杉の樹勢診断等	4
(2) 著名屋久杉の樹勢回復措置	5
(3) 森林生態系モニタリング	
ア. 屋久島西部地域の垂直方向植生モニタリング調査	6
イ. 西部地域におけるヤクタネゴヨウ生育状況調査	10
ウ. アブラギリ駆除対策調査	13
3. 気象モニタリング	
(1) 目的	16
(2) 観測体制	16
(3) 雨量計・温度計設置箇所	16
(4) 平成26年度月別・地点別雨量データ	17
(5) 平成26年度月別・地点別気温データ	17
4. その他	
(1) シカ対策	18
(2) 森林パトロール	19
(3) 縄文杉WEBカメラの管理（保守）	20
III. 普及教育・森林空間利用	
1. 森林教育等の実施	21
2. 自然休養林	
(1) 森林環境整備推進協力金の実施	23
(2) 利用者数	23
(3) ボランティア活動	24
IV. その他	
1. トピックス	25
2. 入林・保護林内調査等の手続き状況	31
3. 保護林調査 報告書	34
4. 広報活動	36

I. 概要

屋久島は、九州最南端の佐多岬から南方約65kmの海上に位置し東西28km、南北24km、周囲132kmのほぼ円形の島です。中央山岳部に九州最高峰宮之浦岳（標高1,936m）をはじめ1,000mを超える山々が連なる山岳島です。黒潮の影響を受け温暖多雨で「一月35日雨が降る」（林芙美子「浮雲」）といわれ、降水量は海岸地帯で年間4,000mm、中央山岳部で10,000mm近くの降水量があります。ヤクスギに代表される植生は、数多くの希少種、北限種、南限種が生育する非常に重要な地域となっています。

屋久島は、約面積50,500ha、森林面積約46,100haの内、国有林面積38,300haです。また、国有林の約4割にあたる15,185haが森林生態系保護地域に指定されています。世界自然遺産地域10,747haの約95% 10,260haが指定されています。屋久島森林生態系保全センターでは、世界自然遺産地域を始めとする貴重な森林生態系を保全、保護していくとともに、他機関等と連携した森林環境教育や自然休養林等での指導・パトロールの実施及び各機関への指導・助言を行い、屋久島の森林の適正な管理・利用に努めています。



Ⅱ. 森林生態系保護

1. 地域連携推進等対策

(1) 縄文杉周辺整備事業

デッキ撤去と植生等回復事業

縄文杉デッキ(写真(1)-1)は、平成5年12月世界自然遺産に登録で、多くの方々が縄文杉を訪れるようになり、根株を踏みしめるなど縄文杉へかかる負担が大きくなったことから、縄文杉とその周辺の自然観察など周辺の自然維持地域の保全を目的として平成7年度に設置されました。

平成24年11月縄文杉正面の大枝の付け根に腐れが見つかり、デッキの一部立入規制等を行うとともに、ケーブリングにより安全確保を図り、平成26年2月に北側デッキを撤去(写真(1)-2)、平成27年3月にデッキ跡地の植生回復事業(写真(1)-3)を実施しました。

縄文杉デッキ等の解体撤去工事のお知らせ (北側デッキ及び階段、栈道)

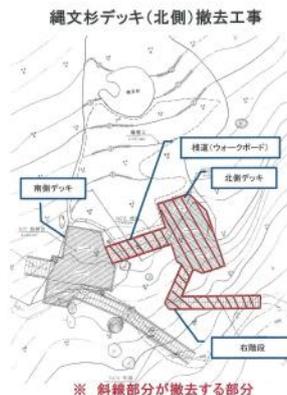
工事期間：2月末～3月24日
発注者：九州森林管理局

縄文杉北側デッキ等の解体撤去工事を行います。

工事期間中、現地にて撤去作業が行われますので、登山者の皆様には、ご協力をお願いします。

現在利用中の南側デッキについては、これまで通り工事の間も使用できます。

屋久島世界遺産地域連絡会議
環境省、林野庁、鹿児島県、屋久島町



写真(1)-1. 縄文杉デッキ



写真(1)-2. 北側デッキ解体



写真(1)-3. 植生回復マット設置

(2)天然生林管理水準確保対策事業（GSS）

林野庁は、自然性の高い天然生林において入り込み者の増加や登山利用の集中化・大衆化等に伴い、人為による植生荒廃や森林機能の低下が見られることから、森林保護員（グリーンサポートスタッフ）による森林パトロールを実施することとし、平成18年度から天然生林管理水準確保対策事業を実施しています。

これにより貴重な価値ある自然を将来に亘って維持していくこととして、その厳正な保護及びその周辺を含めた森林環境の適切な保全管理を推進しています。

具体的には、世界遺産地域を含む屋久島の登山道等の森林パトロール、植生の衰退等の把握、登山者の安全・マナーに対する指導、軽微な補修等を行なっています。



写真(2)-1. 登山道倒木処理



写真(2)-2. 登山道等の軽微な補修



写真(2)-3. 標高板設置



写真(2)-4. 保護林等説明板の清掃

2. 保護林等整備・保全対策

(1) 著名屋久杉の樹勢診断等

ア. 目的

著名ヤクスギのうち、外見上、樹勢が衰えた樹等を中心に現地調査を実施し、被害発生の原因究明と今後の保護対策や改善策を検討することを目的としています。

イ. 事業内容

調査対象木は、葉量や樹皮、バランス等から樹勢の衰えが懸念される樹や歩道に隣接した樹等を中心に選定しました。

●万代杉（モッコヨム登山道）

調査事項は、対象木周辺の生育環境調査、林況調査、樹勢調査、土壌調査、土壌貫入調査を調査しました。

具体的には、立地場所、周囲の状況、潮風の影響、日照条件、土地の傾斜度、土壌、根元及び周囲の植生、周辺樹木との関係、根元付近の工作物、着生種、標準値（チェックポイント）を設けて設定内の下層植生と灌木の種類等、樹高、主幹胸高周囲、根元高20cm周囲、枝下高、樹幹、古枝、空洞、幹の傾き、根株・根系の状況、樹幹の状況、枝の状況、葉の状況、樹冠の腐朽の状況、病害虫の発生状況、キノコの発生状況、土性区分、堅密度、土壌構造、水湿状態、根の発達状態等を調査しました。

調査状況



写真(1)-1. 全景



写真(1)-2. 周囲土壌調査



写真(1)-3. 空洞の状況調査



写真(1)-4. 踏み込みによる根元被害

ウ. 総合診断

根系、根元土壌状況では、西側斜面は登山道上にあり自然林に比べ土壌が踏み固められており土壌条件はあまり良くない。北西の根元周辺は長年の踏圧により根茎が露出し樹皮も相当削られている。根茎の発達に必要な有効土壌が薄く生育条件は厳しい。

幹の状況では、心材の上部開口部から雨水の進入等により直径2mほどの洞となっている。心材外部と樹皮に近い辺材はシロアリの被害が大きい。上部主幹は欠落している。

その他では、材腐朽率が70%程度で有り今後強風等の要因により倒れる恐れある。

(2) 著名屋久杉の樹勢回復措置

ア. 目的

屋久島は、縄文杉等屋久杉の巨木群を代表とする、特殊な生態系と優れた自然景観を有していること等により、世界自然遺産に登録されたものですが、それらの巨木群の中には、入り込み者の踏み込み等により樹勢の衰えなどの影響が発現し、このまま放置すれば樹勢の回復が困難となる可能性も懸念されています。それを未然防止するため樹勢回復措置を実施し、屋久島自然遺産の象徴である屋久杉の適切な保護を図ることを目的としています。

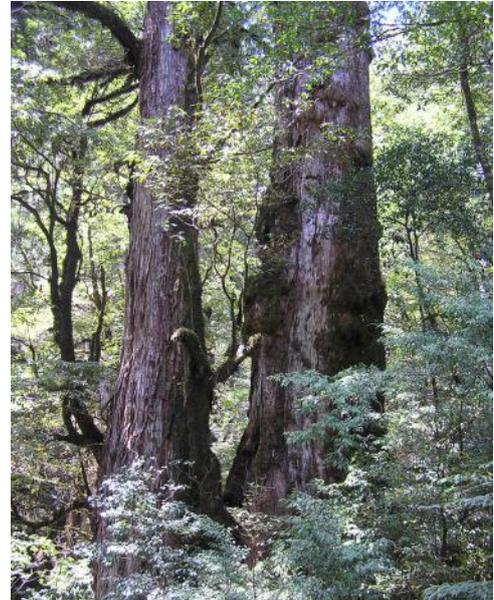
イ. 事業内容

平成21年度から23年度に樹勢診断した著名な屋久杉の中で、平成26年度は4本の樹勢回復措置を行いました。

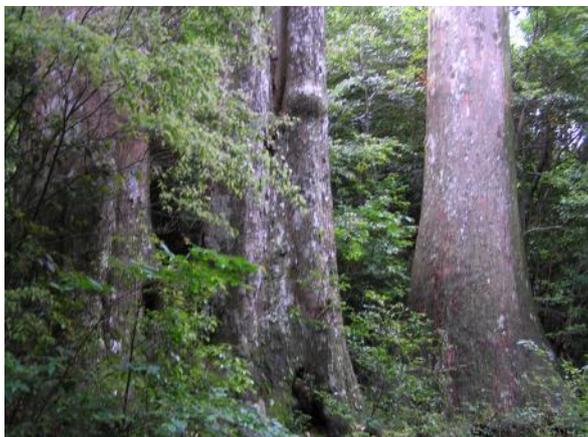
- 七本杉（白谷雲水峡）
 - 母子杉（ヤクスギランド）
 - 三本杉（楠川歩道）
 - 川上杉（淀川登山道）
- 計4本



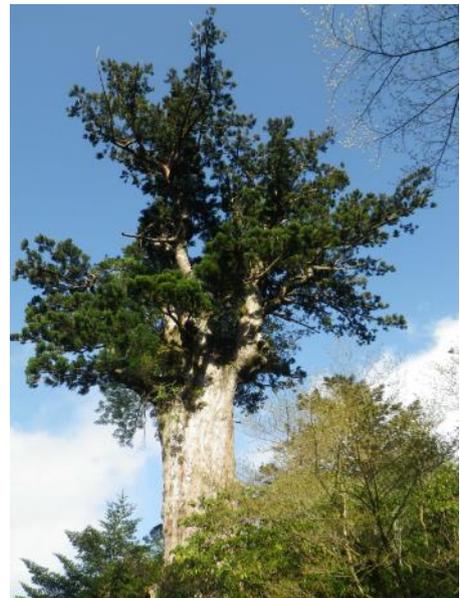
写真(2)-1. 七本杉



写真(2)-2. 母子杉



写真(2)-3. 三本杉



写真(2)-4. 川上杉

(3) 森林生態系モニタリング

ア. 屋久島西部地域の垂直方向植生モニタリング調査

(7) 目的

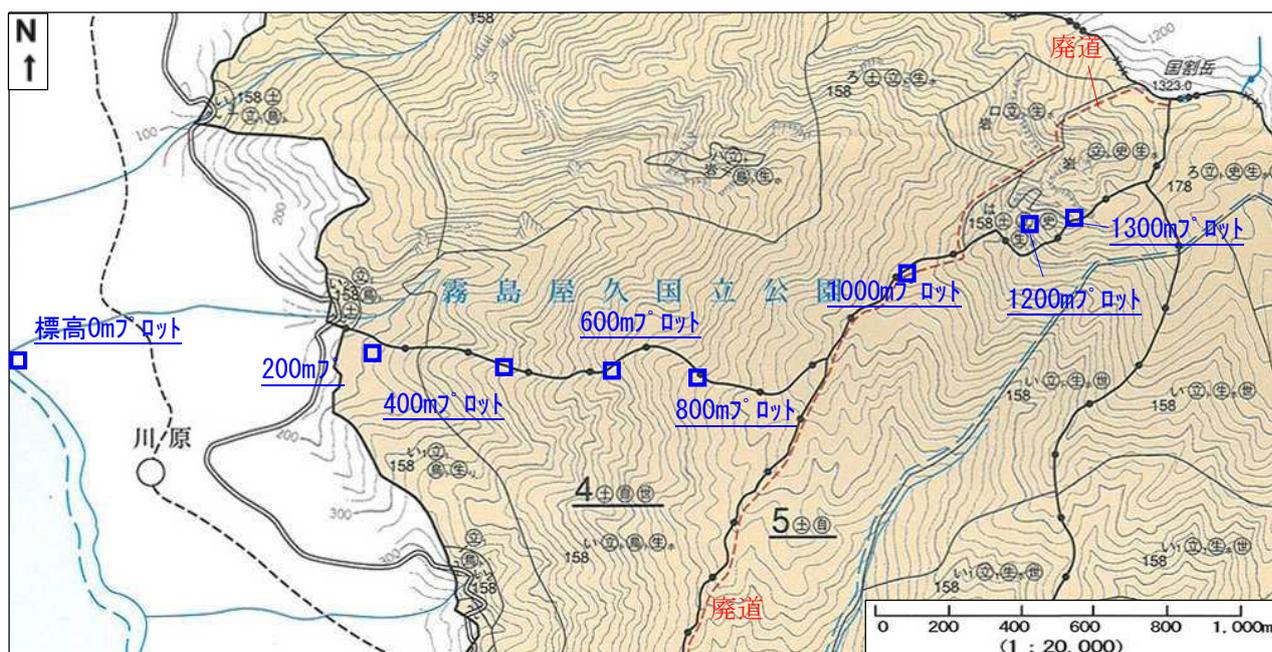
平成5年に世界自然遺産に登録されて以来、屋久島の原生的な自然環境を求めて入り込み者が急増し植生の後退が見受けられる場所があり、屋久島の原生的な森林生態系に影響を及ぼしています。

このため平成16年度及び21年度に実施した国割岳西側斜面においてモニタリングを実施し、植生の比較評価及び環境変化の分析を行うことを目的としています。

(1) 調査内容

平成26年度の植生垂直分布調査は、屋久島西部を対象とし、平成16年度に設定したプロットにおいて、10年経過後の植生変化や林分構造（階層構造）等を観察しました。

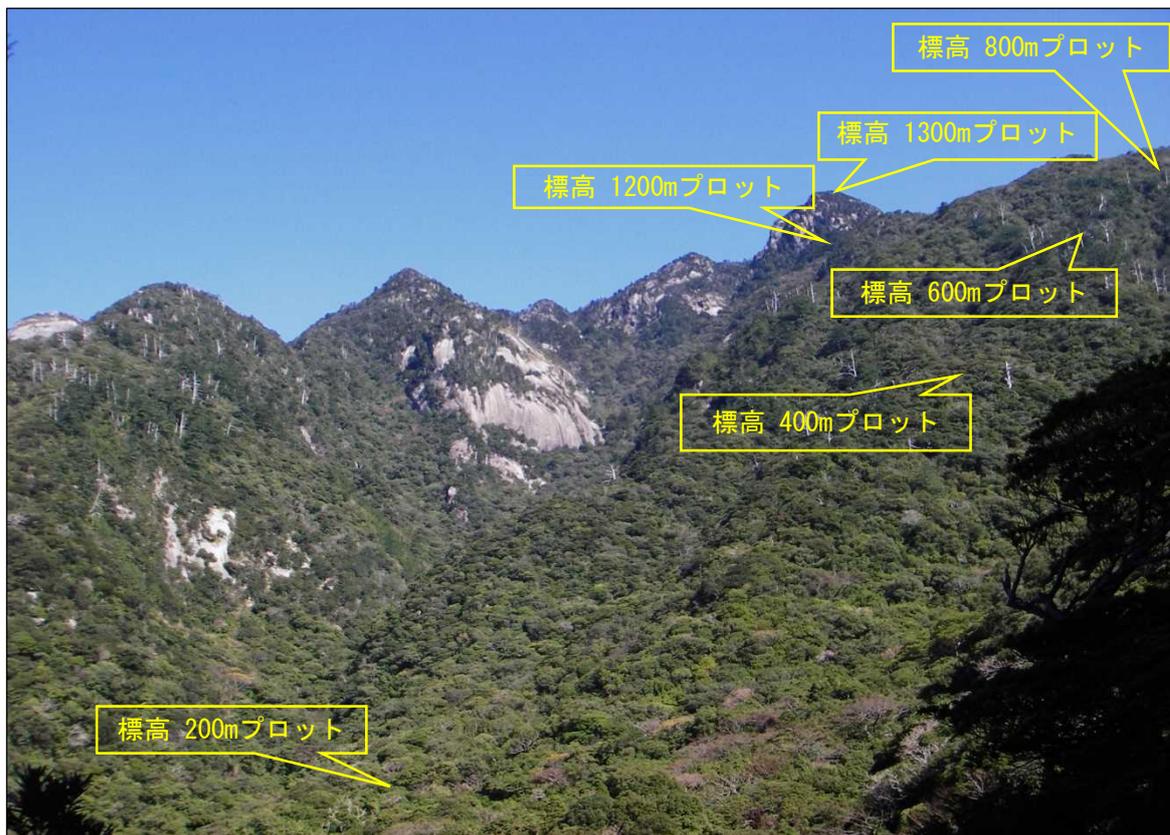
植生垂直分布調査は、標高0m地点から標高1,300m地点まで、標高200m毎に設定されているモニタリングプロットにおいて、プロットの位置・地形等概況把握調査、プロットの拡張調査、階層区分調査、下層植生調査、毎木調査、群落配分図の作成調査、衰退樹木等のモニタリング調査、考察、種別標高別の出現植生リスト作成を行いました。



図(3)-1. 植生垂直分布調査地点位置図（国有林野施行実施計画図より）

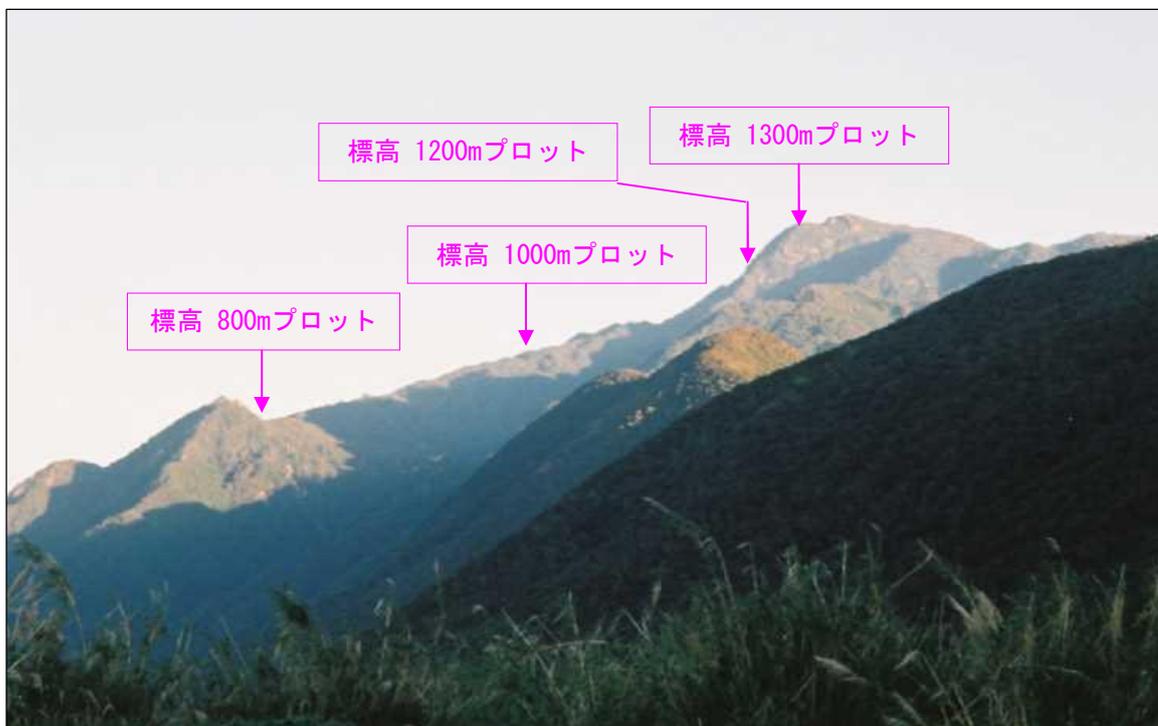
表(3)-1. 標高別プロット地点の各種状況（国有林名と林小班名）

プロット名	国有林名	林小班名	プロット名	国有林名	林小班名
0m	鹿児島県有林	—	800m	平瀬国有林	3林班ろ小班 4林班い小班
200m	平瀬国有林	4林班い小班	1000m	平瀬国有林	3林班ろ小班
400m	平瀬国有林	3林班ろ小班 4林班い小班	1200m	平瀬国有林	3林班は小班
600m	平瀬国有林	3林班ろ小班 4林班い小班	1300m	平瀬国有林	3林班は小班



写真(3)-1. 西部林道から見た調査地の状況

(注)西部林道川原付近から見た写真。標高1200・1300mプロットは、遠距離(直線約2km)から見上げているので、プロットごとの標高差の遠近感が異なる。



写真(3)-2. 南西部から見た調査地の状況

(注)大川の滝と栗生集落の中間付近から見た写真。遠距離(6km遠方)から見上げているので、プロットごとの標高差の遠近感が異なる。

(ウ) 調査結果

【標高0m地点の現況】

- ① 海岸汀線付近はハマヒサカキ群落、内陸部分はガジュマルやアコウ、マテバシイが優占する照葉樹二次林となっている。
- ② 海岸の汀線部分にウバメガシの低木小群落が存在する。
- ③ アコウは標高0～200m付近の所々に単木状に、ガジュマルは海岸付近に集中的に小群落状に分布している。
- ④ 所々に、アコウの胸高直径50cm以上の大径木が存在する。
- ⑤ ヤクシカの摂食により草本層の一部が矮小化して岩間や岩上でのみ生育している。
- ⑥ 特徴的な樹種（標徴種）は、亜熱帯性のアコウ、ガジュマルである。

【標高200m～400m地点の現況】

- ① 潜在的にはスタジイやウラジロガシが優占する照葉樹林であるが、先駆的性格の強いマテバシイ（ブナ科）、イヌガシ、バリバリノキ（クスノキ科）などが高木層を占める照葉樹二次林である。
- ② 所々に、薪炭用の親木として保全されていたウバメガシ、スタジイ、ウラジロガシの胸高直径50cm以上の大径木が存在する。
- ③ 標高350m前後から、乾燥しやすいやせ尾根上に胸高直径50cm以上のヤクタネゴヨウ大径木が群状に点在する。
- ④ ヤクシカの採食により、低木・草本層の樹木の稚樹（特にポチヨウジやタブノキ等）の減少が顕著である。
- ⑤ 特徴的な樹種（標徴種）は、亜熱帯性のフカノキ、ポチヨウジ、アデクと、四国の一部と九州地方南部にのみ生育するオニクロキである。

【標高600m～1,000m地点の現況】

- ① 照葉樹の極相林に生育しやすいイスノキやウラジロガシ、アカガシの胸高直径50cm以上の大径木が多く見られる照葉樹天然林である。
- ② 標高700m程度までの尾根部には胸高直径50cm以上のヤクタネゴヨウ大径木が群状に点在する。
- ③ 標高600m程度からスギやヒメシャラ、ヤマグルマ、ハリギリ等冷温帯性の樹種が僅かだが混入する。
- ④ 風倒跡地のギャップ跡地にはヤクシマオナガカエデ、ヤマザクラ、エゴノキ等の落葉広葉樹が侵入し成林していたが、その場所にイヌガシ等の照葉樹が侵入しつつある。
- ⑤ 乾燥しやすい尾根部のギャップ跡地では、部分的ではあるがヤクタネゴヨウの幼樹が見られる。
- ⑥ この地域は、冬季、北西から吹く季節風のため乾燥しやすく、また標高1,000m以下での降雪は少なく、標高1,000m以下でのスギの生育は極端に少ない。
- ⑦ 特徴的な樹種（標徴種）は、亜熱帯性のアデク、ミミズバイと、四国の一部と九州地方南部にのみ生育するオニクロキ、屋久島及び種子島にのみ生育するヤクタネゴヨウ等である。

(3) 森林生態系モニタリング

ア. 屋久島西部地域の垂直方向植生モニタリング調査

(7) 目的

平成5年に世界自然遺産に登録されて以来、屋久島の原生的な自然環境を求めて入り込み者が急増し植生の後退が見受けられる場所があり、屋久島の原生的な森林生態系に影響を及ぼしています。

このため平成16年度及び21年度に実施した国割岳西側斜面においてモニタリングを実施し、植生の比較評価及び環境変化の分析を行うことを目的としています。

(4) 調査内容

平成26年度の植生垂直分布調査は、屋久島西部を対象とし、平成16年度に設定したプロットにおいて、10年経過後の植生変化や林分構造（階層構造）等を観察しました。

植生垂直分布調査は、標高0m地点から標高1,300m地点まで、標高200m毎に設定されているモニタリングプロットにおいて、プロットの位置・地形等概況把握調査、プロットの拡張調査、階層区分調査、下層植生調査、毎木調査、群落配分図の作成調査、衰退樹木等のモニタリング調査、考察、種別標高別の出現植生リスト作成を行いました。

(7) 調査結果

【標高0m地点の現況】

- ① 海岸汀線付近はハマヒサカキ群落、内陸部分はガジュマルやアコウ、マテバシイが優占する照葉樹二次林となっている。
- ② 海岸の汀線部分にウバメガシの低木小群落が存在する。
- ③ アコウは標高0～200m付近の所々に単木状に、ガジュマルは海岸付近に集中的に小群落状に分布している。
- ④ 所々に、アコウの胸高直径50cm以上の大径木が存在する。
- ⑤ ヤクシカの摂食により草本層の一部が矮小化して岩間や岩上でのみ生育している。
- ⑥ 特徴的な樹種（標徴種）は、亜熱帯性のアコウ、ガジュマルである。

【標高200m～400m地点の現況】

- ① 潜在的にはスタジイやウラジロガシが優占する照葉樹林であるが、先駆的性格の強いマテバシイ（ブナ科）、イヌガシ、バリバリノキ（クスノキ科）などが高木層を占める照葉樹二次林である。
- ② 所々に、薪炭用の親木として保全されていたウバメガシ、スタジイ、ウラジロガシの胸高直径50cm以上の大径木が存在する。
- ③ 標高350m前後から、乾燥しやすいやせ尾根上に胸高直径50cm以上のヤクタネゴヨウ大径木が群状に点在する。
- ④ ヤクシカの採食により、低木・草本層の樹木の稚樹（特にポチョウジやタブノキ等）の減少が顕著である。
- ⑤ 特徴的な樹種（標徴種）は、亜熱帯性のフカノキ、ポチョウジ、アデクと、四国の一部と九州

表(3)-2. プロット別の5年前との比較によるヤクシカ摂食影響の多少(包括的)

(顕著に増えた)		(増えた)		(あまり変わらない)	
標高 0m 標高 200m 標高 1300m	>	標高 400m 標高 1000m	≧	標高 600m 標高 800m	≧
					標高 1200m

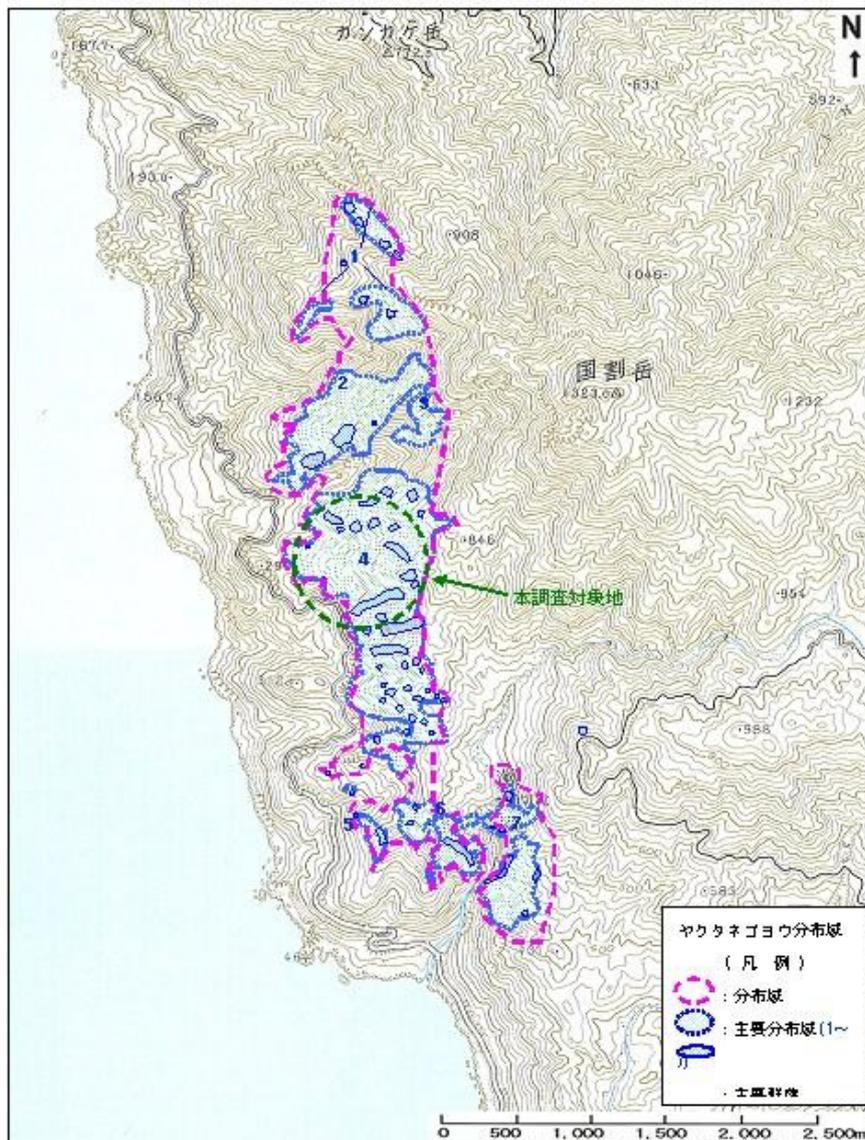
イ. 西部地域におけるヤクタネゴヨウ生育状況調査

(7) 目的

西部地域において環境省レッドデータで絶滅危惧(I B)種に指定されているヤクタネゴヨウの生育状況について調査を行い、その変化を把握し保全対策をとりまとめることを目的としています。

(イ) 調査内容

ヤクタネゴヨウ群落プロット調査とヤクタネゴヨウの単木モニタリングを実施し、平成16年度及び平成21年度の調査結果との比較から、ヤクタネゴヨウ群落内の林分構造の動態やヤクタネゴヨウ単木の活力状況を評価しました。



図(3)-2. 西部地域におけるヤクタネゴヨウの分布状況

(ウ) 調査結果

【標高420m地点の現況】

- ① 低木層の、植被率・本数は増加したが種数は前回と同じであった。
- ② 照葉樹の生育が旺盛で、ヤクタネゴヨウの根本付近の土壌が、貧栄養土壌から照葉樹の腐葉土が厚く堆積した土壌へと変化しつつある。
- ③ 照葉樹の林冠の発達は、林床への光の到達を遮り、ヤクタネゴヨウの実生の発芽とその後の生育に影響を与えているものと考えられ、実生苗は確認できなかった。

【標高470m地点の現況】



写真(3)-3. 標高470mヤクタネゴヨウ群落プロット付近の概況

- ① 低木層の、植被率・本数は前回調査と同様であったが種数は減少した。
- ② 照葉樹の生育が旺盛で、ヤクタネゴヨウの根本付近の土壌が、貧栄養土壌から照葉樹の腐葉土が厚く堆積した土壌へと変化しつつある。
- ③ 照葉樹の林冠の発達は、林床への光の到達を遮り、ヤクタネゴヨウの実生の発芽とその後の生育に影響を与えているものと考えられ、実生苗は確認できなかった。

【標高550m地点の現況】

- ① 低木層の、植被率・本数は前回調査と同様であった。
- ② 前回調査では、実生苗を10本確認できたが、今回の調査では確認できなかった。
- ③ 林床が、前回調査より日当たりが悪くなったこと、照葉樹の落葉腐食層が堆積したこと及びヤクシカの採食と関係していると考えられる。

【標高700m地点の現況】

- ① 低木層がヤクシカの摂食等により、種数・本数ともに減少した。植被率は増えたが 優占種はアリドオシから不嗜好植物であるヨゴレイタチシダに変わった。
- ② 高木層優占種である、ヤクタネゴヨウやイスノキが前回調査は確認されたが、今回はヤクタネゴヨウは確認されなかった。
- ③ 樹冠自体は旺盛に成長しており、土壌が貧栄養土壌から照葉樹の腐葉土が厚く堆積した土壌へと変化しつつある。
- ④ 林床への光の到達が遮られ、ヤクタネゴヨウの実生苗の生育は確認できなかった。

【単木モニタリング結果】

- ① 前回までの調査結果では、活力度は、標高が高いほど、樹高が高いほど、胸高直径が太いほど、高くなる傾向が見られたが、今回は標高が高いほど衰退傾向、樹高が高いほど衰退しているように見える。
- ② 強風等による気象害等の影響が考えられ、継続的なモニタリングが必要である。
- ③ 前回から今回にかけての活力変化と、シロアリ穿入痕の有無との関連性は確認できなかった。

(I) 考察

- ① 西部地域のヤクタネゴヨウ群落は、照葉樹の旺盛な生育箇所であり、痩せ地であった尾根部にも徐々に照葉樹の落葉腐食層が堆積しつつあり、ヤクタネゴヨウの根本付近の土壌環境が変化しつつあり、前回調査より進行していた。
- ② 62本のヤクタネゴヨウ単木モニタリング木のうち、5年前と比較し3本が枯死し、生立木は49本、枯死木が13本となった。生立木49本の活力状況の変化は、やや衰退しつつある個体、やや健全になりつつある個体が混在しているが、全体的に衰弱している個体が見られた。
- ③ 枯死した3個体はいずれも幼齢木で5年前のモニタリング時点で既に亜高木照葉樹の被圧により衰弱しつつあったが、今回調査で完全に枯死していた。
- ④ 標高400m～600m付近までのヤクタネゴヨウ大径木の衰退木の多くの根株には、シロアリの侵入痕が見られ、心材腐朽している個体も多かった。
- ⑤ 屋久島ではマツノザイセンチュウ病によるクロマツノ枯死が継続的に見られ、巡視や伐倒駆除等のマツ枯れ対策を引き続き継続・強化する必要がある。
- ⑥ 照葉樹による被圧や土壌の腐植化、ヤクシカの採食による影響、その他の理由により3～20年生程度の幼齢木個体が極めて少ない。このことにより、将来的にヤクタネゴヨウの大径木が枯死した場合、健全な更新が期待できない。特に、今回の単木モニタリングで明らかになったように、ヤクタネゴヨウ幼齢木の樹冠上部の照葉樹が旺盛な生育を示している場所では、幼齢木は被圧され衰退し枯死する可能性が高い。
- ⑦ 実生苗から幼齢木へと成長する環境を調査し、また幼齢木が健全に更新するためのプロセスを明らかにして、そのプロセスを阻害する要因の把握と、阻害要因を排除する保全措置を検討する必要性から、今後も同様のモニタリングを継続的に実施することが望まれる。

ウ. アブラギリ駆除対策調査

(7) 既存試験地の継続調査

a. 低木駆除調査

(a) 目的

アブラギリは、ギャップ地での生育拡大が顕著で、伐採跡地、間伐地等への侵入が顕著で、稚樹は1年間に1m程度成長します。

そこで、伐採跡地に侵入したアブラギリ稚樹を対象とした駆除調査を行い、効果及び効率性（コスト）や安全性等の把握、検証することを目的とします。

(b) 調査内容

伐採跡地に生育する2～3年生のアブラギリ稚樹のうち、根元径・樹高、樹勢が平均的な120本を選定し平成24年9月に、①伐採②伐採し伐根を遮蔽シートで被覆③引き抜きを各40本実施し駆除効果の検証を実施しました。

(c) 調査結果

アブラギリの生存率は、遮蔽シート非設置91.7%、遮蔽シート設置69.2%で平成25年度の生存率と同程度であった。

平均萌芽数は、遮蔽シート設置及び遮蔽シート非設置ともに前年度と比較し減少した。平均萌芽枝長は、遮蔽シート非設置が遮蔽シート設置と比較し、少ない数値を示したことから遮蔽シートの効果があると考えられる。

表(3)-3. アブラギリの低木駆除調査結果

項目		株数				生存率 (%)	平均萌芽数 (本)	平均萌芽枝長 (cm)
		生存	枯死	不明	合計			
伐採	遮蔽シート設置	28	11	0	39	71.8	3.6	68.2
	遮蔽シート非設置	33	3	0	36	91.7	4.7	85.6
	引き抜き	0	34	1	35	0.0	0.0	0.0
前年度								
項目		株数				生存率 (%)	平均萌芽数 (本)	平均萌芽枝長 (cm)
		生存	枯死	不明	合計			
伐採	遮蔽シート設置	27	11	1	39	69.2	2.2	117.0
	遮蔽シート非設置	33	2	1	36	91.7	2.7	165.0
	引き抜き	0	22	13	35	0.0	0.0	0.0
本年度								

写真(3)-4. アブラギリ低木駆除調査地の状況



プロット設定1年経過後



プロット設定2年経過後

b. 成木駆除調査

(a) 目的

アブラギリは、1年で1m程度の生育を示し、また、萌芽力も旺盛で、伐採しても直ぐに萌芽枝が生育し、駆除が困難な樹種です。

そこで、アブラギリ成木を対象とした駆除調査を行い、効率性（コスト）や安全性等の把握、検証することを目的とします。

(b) 調査内容

アブラギリ成木のうち、根元径・樹高、樹勢が平均的な90本を選定し平成24年9月に、①伐採②伐採し伐根を遮蔽シートで被覆③巻き枯らし（環状剥皮）を各30本実施し駆除効果の検証を実施しました。

(c) 調査結果

アブラギリの生存率は、遮蔽シート非設置14.1%、遮蔽シート設置2.4%、環状剥非1.6%であった。昨年度の、遮蔽シート設置と環状剥皮の生存率は、ほとんど変わらなかった。本年度、環状剥皮の生存率が大きく下がった。

平均萌芽枝長は、遮蔽シート非設置が遮蔽シート設置と比較し、少ない数値を示したことから遮蔽シートの効果があると考えられる。

表(3)-4. アブラギリ成木駆除調査の駆除種別生存本数

項目		株数				生存率 (%)	平均萌芽数 (本)	平均萌芽枝長 (cm)
		生存	枯死	不明	合計			
前年度								
伐採	遮蔽シート設置	8	34	0	42	19.0	3.6	44.1
	遮蔽シート非設置	27	51	0	78	34.6	8.6	59.9
	環状剥皮	19	42	0	61	31.1	8.9	34.8
本年度								
伐採	遮蔽シート設置	1	38	3	42	2.4	1.0	55.0
	遮蔽シート非設置	11	62	5	78	14.1	6.0	111.5
	環状剥皮	1	55	5	61	1.6	11.0	40.0

写真(3)-5. アブラギリ成木駆除調査地の状況



プロット設定1年経過後



プロット設定2年経過後

(イ) 新規調査

a. 目的

林内に生育するアブラギリについての調査が、これまで行われてこなかったことからスギ造林地において、生育するアブラギリ低木の調査を実施します。

b. 調査内容

試験地に3プロットを設置し現況把握のため、造林木の毎木調査、アブラギリ低木の調査及び試験地の環境を把握するための植生調査を実施した後、アブラギリ低木を伐採し、植生保護柵を設置しました。

遮蔽シートの遮光率の違いと、伐採されたアブラギリの生育状況を把握するため、生分解性の遮蔽シート①遮光率80%②遮光率90%③無処理をアブラギリ伐根に行いました。

c. 調査結果

植生調査の結果プロット①24種②17種③23種を確認。今後、アブラギリの伐採株の追跡調査とともに、生育環境把握のために植生調査等のモニタリングが必要である。



写真(3)-6. 調査箇所の状況



写真(3)-7. アブラギリの萌芽枝

3. 気象モニタリング

(1) 目的

屋久島では、年間4,000～8,000mmに達する降雨があること、花崗岩特有の表層の浅い地域が多いこと等から、山腹崩壊、土砂流出等の山地災害も多く発生しています。

また、標高0m～1,900mに達する海岸線から奥岳に至るまでの標高差の中において、多種多様な動植物が生息しています。

これらのことから、国有林の要所において雨量と温度の観測を実施し、永続的なデータを保存し森林生態系を研究することとし、雨量計及び温度計を設置しています。

※この雨量及び温度観測は気象業務法第6条1項1の研究のために行う気象の観測となっています。

(2) 観測体制

データの回収・記録管理は屋久島森林生態系保全センターで行っている。データ回収については、職員実行で3ヶ月に1回程度行っていますが、台風等の著しい気象の変化があった場合はその都度データの回収を行うことにしています。

(3) 雨量計・温度計設置箇所



番号	設置箇所	林小班	標高	備考
①	屋久島森林生態系保全センター	敷地内	5m	H7. 08. 31設置
②	白谷林道220支線	219 い	650m	H9. 11. 11設置 H24.02白谷から移設
③	宮之浦林道233支線	233 ふ	510m	H8. 03. 26設置
④	小杉谷事業所跡	101 イ	680m	H8. 02. 07設置
⑤	大川林道	9 る	1,020m	H8. 02. 01設置
⑥	淀川登山口	62 い	1,380m	H7. 12. 25設置
⑦	黒味岳頂上付近	22 ニ	1,800m	H8. 05. 31設置
⑧	永田カンカケ岳付近	275 た	730m	H12. 07. 12設置
⑨	白谷雲水峡	215 い	630m	H12. 05. 10設置
⑩	ヤクスギランド	79 ハ	1,000m	H11. 03. 17設置
Ⓐ	白谷林道220支線	219 い	650m	H23. 02. 18設置
Ⓑ	淀川登山口	62 い	1,380m	H26. 02. 21設置
Ⓒ	湯泊林道	44 に	580m	H22. 11. 16設置

(4) 平成26年度 月別・地点別雨量データ (mm)

月\観測点	①保全センター	②白谷林道	③宮之浦林道	④小杉谷	⑤大川林道	⑥淀川登山口	⑦黒味岳山頂	⑧永田カンカケ岳	⑨白谷雲水峡	⑩ヤクスギランド
平成26年4月	145.0	6.0	164.0	36.0	381.0	—	233.5	191.5	492.0 *	588.5
5月	144.5	84.5	306.5	53.0	663.5	0.0 *	422.5	315.5	261.5	924.5
6月	866.5	1,147.5	1,105.5	904.5	1,071.0	749.0 *	1,025.5	767.5	987.5	1,232.0
7月	532.0	1,062.0	1,074.0	999.0	799.5	—	1,035.5	345.0	779.5	950.0 *
8月	393.0	824.0	836.5	790.5	1,146.5	—	808.5	538.5	444.0 *	761.5
9月	1,041.0	931.5	497.0	953.5	438.5	70.0 *	422.0	282.0	1,175.5	978.0
10月	338.5	288.5	777.5 *	960.5	1,308.5	1,434.5 *	1,141.0	259.5	904.5	878.0
11月	268.5	51.5	—	373.0	126.0	—	271.5	239.5	325.0 *	591.0
12月	339.5	361.0	379.0 *	480.5	248.5	373.5 *	167.0	203.5	486.5	535.5
平成27年1月	156.0	197.0	247.0	385.5	221.5	—	169.0	211.0	254.5	674.5
2月	75.0	127.0	169.5	203.5	110.0	—	19.0	140.5	158.5	549.0
3月	209.0	222.5	169.5	292.0	311.0	—	0.0	172.0	169.0 *	745.5
合計	4,508.5	5,303.0	5,726.0 *	6,431.5	6,825.5	2,627.0 *	5,715.0	3,666.0	6,438.0 *	9,408.0 *

—は欠測、*は欠測期間を除いた合計

(5) 平成26年度 月別・地点別気温データ (°C)

観測点 年月	Ⓐ白谷林道						Ⓑ淀川登山口						Ⓒ湯泊林道					
	平均			最高	最低	欠測	平均			最高	最低	欠測	平均			最高	最低	欠測
	日平均	日最高	日最低				日平均	日最高	日最低				日平均	日最高	日最低			
平成26年4月	13.0	16.4	10.7	19.8	4.7		8.2	12.7	4.1	18.7	-1.9		13.9	17.3	11.3	21.7	6.2	
5月	17.5	21.7	14.5	26.9	9.2		12.0	17.7	6.9	22.3	0.9		17.9	21.9	14.8	26.1	10.8	
6月	19.1	22.4	16.5	26.4	13.0		15.3	19.2	11.5	22.5	7.9		19.7	22.7	16.9	25.5	13.8	
7月	23.5	26.8	21.6	30.8	17.9		19.3	23.0	16.4	27.5	11.9		23.9	26.9	21.6	31.2	17.4	
8月	23.2	26.1	21.4	29.0	19.9		18.8	21.8	16.6	25.1	12.6		23.8	26.9	21.8	29.6	19.9	
9月	21.5	24.2	19.9	27.0	16.8	*	16.6	20.6	13.4	25.2	7.9		22.3	25.8	20.0	29.4	17.7	
10月	17.7	20.0	15.9	25.5	12.3		12.6	16.7	8.5	21.3	0.7		19.1	22.5	16.3	25.3	12.1	
11月	13.8	15.8	11.8	20.7	7.8		8.5	12.1	4.6	17.5	-2.7		15.5	22.0	12.3	32.0	7.5	
12月	6.9	9.2	4.7	17.3	1.1		1.8	5.2	-1.3	14.0	-6.5		8.5	14.0	5.4	23.3	1.7	
平成27年1月	7.0	9.1	4.9	14.3	0.4		1.9	6.2	-1.8	10.9	-5.1		8.4	11.5	5.6	15.2	0.5	
2月	6.4	9.2	4.0	15.8	-0.5		1.7	5.6	-1.8	12.1	-7.3		8.0	11.5	5.3	17.6	0.1	
3月	10.1	14.0	7.6	21.5	0.7		5.7	10.3	1.5	20.5	-4.4		11.2	14.8	8.5	20.6	1.5	
平均	15.0	17.9	12.8	—	—		10.2	14.3	6.6	—	—		16.0	19.8	13.3	—	—	
最高・最低	—	—	—	30.8	-0.5		—	—	—	27.5	-7.3		—	—	—	32.0	0.1	

*Ⓐ白谷林道9月19~22日欠測

4. その他

(1) シカ対策

屋久島世界遺産地域科学委員会

第1回目10月25・26日、第2回目2月25・26日に屋久島世界遺産地域科学委員会及びヤクシカワーキンググループ会議が行われ、ヤクシカ対策について、県が策定を予定している第二種特定鳥獣管理計画と連携して進めることや、依然として減少傾向がうかがえない生息頭数の把握方法や管理手法について、及び「生態系管理目標(素案)の設定」、平成27年度策定予定の「屋久島地域ヤクシカ管理計画(仮称)」について議論がなされました。

局委託調査協力

九州森林管理局が委託契約する「野生鳥獣との共存に向けた(屋久島地域)業務」については、モニタリング調査、ヤクシカの移動状況等調査、ヤクシカの捕獲手法等の検討及び検証、植生の保護再生手法の検討を実施することとなっており、センターにおいては、受託者と連携を図りつつ各種調査等の指導助言及び調査協力を行いました。

有害鳥獣捕獲等

ヤクシカの適正な生息頭数目標に向けて、平成21年度より実施している国有林内の職員実行による有害鳥獣捕獲を、今年度も屋久島森林管理署、屋久島森林生態系保全センターで実施したところです。捕獲頭数として国有林内捕獲頭数が553頭で内センター捕獲頭数は91頭でした。



写真(1)-1. 有害鳥獣捕獲に使用している笠松式くくり罠



写真(1)-2. ヤクシカの食害を防止するために設置した防護柵

表(1)-1. 屋久島におけるヤクシカの捕獲数の推移(第2回目のヤクシカワーキンググループ会議資料)

捕獲年度		H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
有害	国有林外	296	311	294	368	276	205	312	1,197	1,975	3,403	4,129
	国有林内	-	-	-	-	-	-	13	501	315	413	364
	狩猟	0	0	0	0	93	114	155	250	316	714	33
	合計	296	311	294	368	369	319	480	1,948	2,606	4,530	4,526
→メスジカの狩猟解禁												
→オスジカの狩猟解禁												

(2) 森林パトロール

当センターでは、屋久島森林管理署と協力し、登山者が多くなる春のシャクナゲ開花時期とを夏休み期間中に森林パトロールを実施しています。

5月26日～6月6日に実施した「シャクナゲパトロール」では、高山植物の盗掘防止や登山マナーの呼びかけを行いました。春先にかけて気温の変動が大きく開花が遅れましたが、数年来の大開花となり宮之浦岳周辺は一面お花畑となりました。



写真(2)-1. 満開のヤクシマシャクナゲ

○パトロール日数・人数等：日数・・・9日間
延べ人数・・・28人

- (内訳) ①淀川登山口～宮之浦岳 3日間 (延べ11人)
②淀川登山口～黒味岳 3日間 (延べ10人)
③大川林道終点～永田岳 3日間 (延べ7人)

夏に実施した「安全パトロール」は7月23日～8月31日の間、縄文杉登山者への指導に加え、淀川登山口～宮之浦岳、ヤクスギランド～太忠岳、千尋滝展望所登山口～本富岳など主な6つのコースのパトロールを計画。7月31日は永田岳までのパトロールを行い、危険個所の点検や、登山者へ安全の呼びかけを行いました。



写真(2)-2. 中央は永田岳、左はローソク岩

○パトロール日数・人数等：日数・・・11日間
延べ人数・・・24人

- (内訳) ①白谷林道217支線～縄文杉 3日間 (延べ8人)
②淀川登山口～宮之浦岳・黒味岳 1日間 (延べ2人)
③大川林道終点～永田岳 2日間 (延べ4人)
④ヤクスギランド～太忠岳 1日間 (延べ2人)
⑤愛子岳登山口～愛子岳 1日間 (延べ2人)
⑥千尋滝展望所登山口～本富岳 3日間 (延べ6人)

(3) 縄文杉WEBカメラの管理（保守）

屋久島のシンボリック存在である縄文杉は、平成17年5月樹皮が心ない登山者により剥離されるといって極めて悪質な悪戯による被害を被り、さらに12月には積雪により枝の一部が折損落下するという事態が生じたところです。

そのため、登山マナーの低下に起因する縄文杉等貴重な動植物に対する悪戯等の監視を行うことを目的として、静止画像用撮影カメラを北デッキに設置していましたが、平成24年11月に大枝の基部に空洞を含む腐朽部が見つかったことから、静止画像用撮影カメラを含む北デッキを平成26年3月解体撤去したところです。

その後その目的を継承するために、平成26年10月センサーカメラ2台を南デッキに設置し、縄文杉及び周辺の森林生態系の管理体制の充実強化を図っています。



写真(3)-1. 撤去前の北デッキとウェブカメラ・ソーラーパネル



写真(3)-2. 南デッキに設置したセンサーカメラ2台

Ⅲ. 普及教育・森林空間利用

1. 森林教育等の実施

●屋久島高等学校 学校登山事前指導 (平成26年6月19日 屋久島高等学校)

登山上の注意点及び簡易トイレの使用方法について

生徒80人 教職員15人

目的

屋久島高等学校独自の伝統行事を継承し、郷土に伝わる「岳詣り」の風習を体験しながら、屋久島の優れた自然環境や自然と人間との結びつきを考え、環境保護に対する意識の高揚に努める

- ①屋久島が世界自然遺産に登録されたことにより、入山者が増加したこと。
- ②それに伴い、避難小屋のトイレ維持管理費が膨らんでいること。
- ③また、野外での用足しによる自然環境に与える影響こと。

など、

簡易トイレの利用とメリットについて説明し、積極的に使用して貰うようお願いしました。



写真1-1. 屋久島高校での指導

●大分舞鶴高等学校 (スーパーサイエンスハイスクール指定) 体験学習

(平成26年11月15日 宮之浦岳国有林224林班外)

目的

- ①屋久島の自然を肌で感じ、自然への興味・関心を一層高める。
- ②科学的探求を行う上でのスキル・心構えを体得する。

体験学習の内容

外来種アブラギリが侵入した人工林内に調査区を設定し毎木調査を行いました。調査区の林分構造を解析(アブラギリの水平分布、垂直分布)し、アブラギリが今後どのように推移していくのかを推測しました。

プロット1：間伐後5年経過 スギ単層林 林齢58年

プロット2：アブラギリ純林 天然林 林齢15年



写真1-2. 大分舞鶴高校の実習

参考

ヤクシカの忌避植物である外来種アブラギリは、同じ陽樹のカラスザンショウやヤクシマオナガカエデがシカ食害により衰退する中、繁殖地を拡大させ人工林内への侵入も見られ、森林生態系への影響が懸念されています。

●夏休み親子森林教室 (平成26年8月23日 ヤクスギランド)

屋久島レクリエーションの森保護管理協議会主催

未来を担う子どもたちに、①世界自然遺産屋久島の自然や歴史に親子で楽しんでもらうことを目的に開催しました。

参加者26名は、ヤクスギランド50分コースを屋久島観光協会ガイドの説明で散策しました(3班)。

参加者からは、ヤクスギランドがこんなにも魅力的な所だとは知らなかった」などの声が聴かれ、巨木が静かにたたずむ苔むした屋久島の森林を堪能していました。

ヤクスギランドで見られる樹木を中心に作成した「手作り図鑑」と「翼をもった種子」の模型を子どもたちにプレゼント。



写真1-3. 倒木更新を観察する参加者



写真1-4. 屋久杉電話ボックスの前で記念撮影

●ヤクタネゴヨウ自生地(植物群落保護林)現地見学会 (平成26年5月20日)

6月6日～8日に屋久島で開催された「第2回国際照葉樹林サミットin屋久島」のプレイベントとして、5月20日、「ヤクタネゴヨウ植物群落保護林」において現地見学会を開催しました。

一般参加者17人は、保護林が遠望できる瀬切大橋と標高900mの展望所から、ヤクタネゴヨウまでのコースや保護林の概要(100周年)について、また、ヤクタネゴヨウ調査隊の手塚賢至氏からは、ヤクタネゴヨウの保全に向けた調査概要の説明を受けました。

ヤクタネゴヨウの巨木を見たいという参加者の思いは強く、帰りの2時間近くの登りに苦労しながらも満足げで、現地見学会をまた開いてほしいとの声が聞かれました。



写真1-5. 瀬切大橋から遠望する参加者



写真1-6. 直径2m以上の巨木の前

2. 自然休養林

(1) 森林環境整備推進協力金の実施

森林及び利用施設の整備と環境美化のため、協力金制度を導入しています。

協力金の額 高校生以上 1人 300円 (15人以上団体扱い 1人250円)

※島内在住者を除く

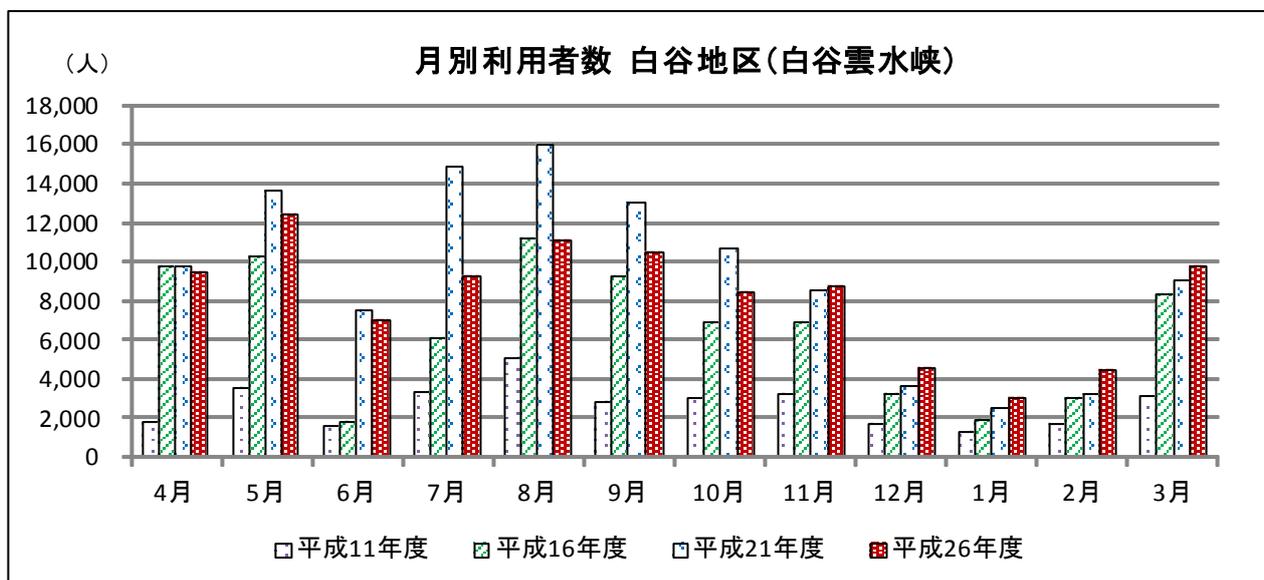
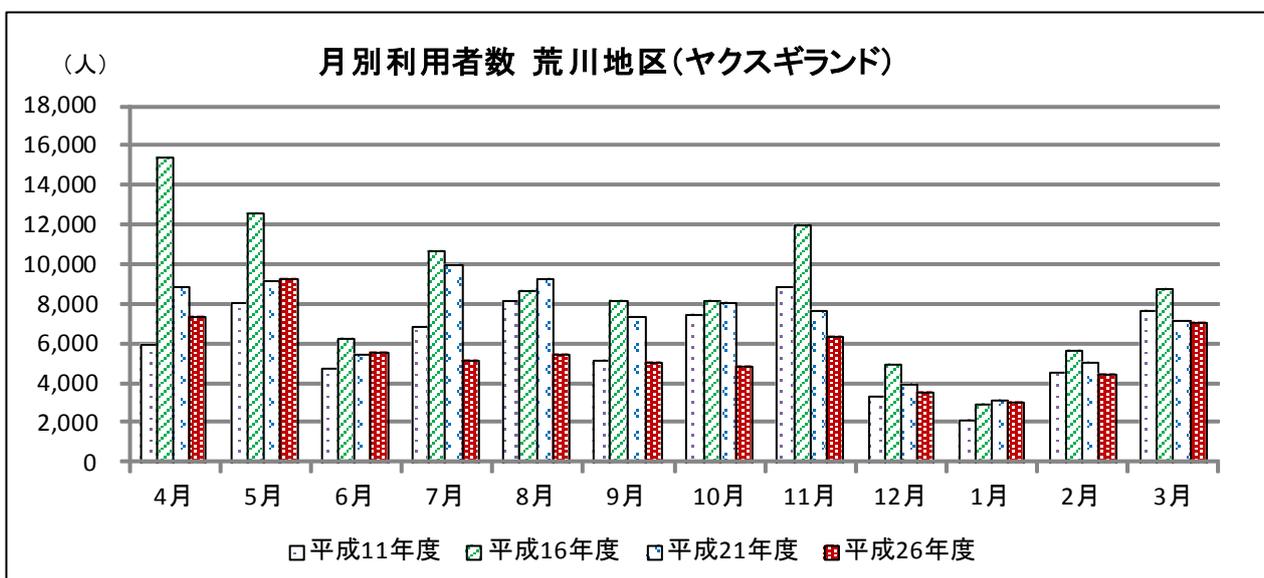
平成26年度協力金徴収額合計 41,002千円

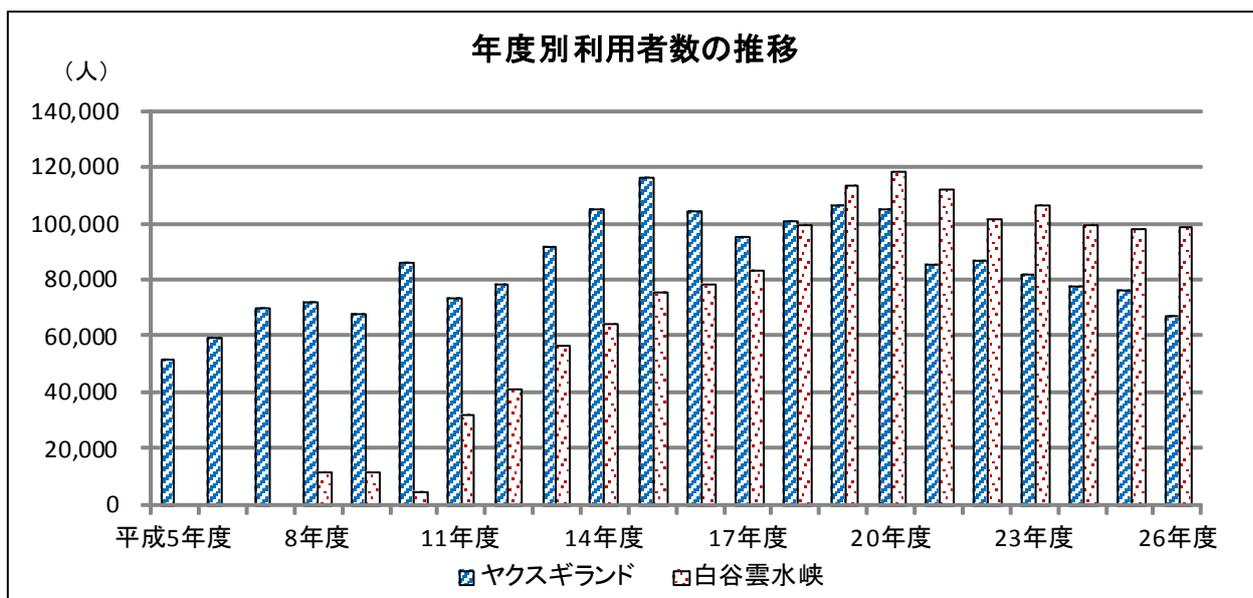
協定締結相手方 「屋久島レクリエーションの森保護管理協議会」

(2) 利用者数

荒川地区 (ヤクスギランド) 66,939人

白谷地区 (白谷雲水峡) 97,917人 計164,856人





(3) ボランティア活動

支援協定を結んでいるアサヒビール(株)と地元の関係機関とで、屋久島自然休養林内における清掃等ボランティア活動を平成20年度から毎年実施しています。前年は屋久島世界自然遺産登録20周年を記念し、一般参加者を募集して多数の参加をいただいたことがご縁で、本年も一般の方8人の参加をいただき、11月8日白谷雲水峡において、アサヒビール15人、関係機関32人、一般8人、総勢55人の参加のもと活動を実施しました。

今回の活動内容は、午前は入口周辺の看板、東屋、ガードレールの苔落としや看板の補修などを行い、午後からは森に入って木道・手摺りの苔落としや石道の清掃を6班で分担して行いました。

当日は小雨の中での作業でしたが、この時期にしては作業に適した気温(15℃)で、入口周辺の看板や遊歩道の木道、手摺りなどが見違えるように綺麗になり、参加者の皆さんも満足していました。



写真2-1. 木道を清掃する参加者



写真2-2. 雲水峡入口で記念撮影

IV. その他

1. トピックス

●国際照葉樹林サミット（平成26年6月6日～8日）

「第2回国際照葉樹林サミット in 屋久島」が屋久島町宮之浦の離島開発総合センターで開かれました。当サミットは、照葉樹林への理解を深め、その保護と利用に関する情報交換や交流を通じて持続可能な自然と人と文化の未来を展望し、地域づくりにつなげることを目的に行われたものです。当サミットでは、屋久島・口永良部島のユネスコエコパーク再登録を目指した取り組みも併せて行われました。



写真1-1. 保護林について紹介

当日は荒木耕治屋久島町長の開会あいさつで始まり、来賓

の川端省三九州森林管理局長からは「照葉樹林の素晴らしさに理解を深め、次世代に引き継ぐ重要性を共有するとともに、照葉樹林や生物多様性の保全、森林を活かした地域づくりについて地域の皆さまと連携した取り組みを進めたい」とあいさつ。

サミットは、京都大学霊長類研究所の湯本孝和教授とブータン農業省再生可能資源リサーチセンターのペマ・ワンダ所長が基調講演。また、「照葉樹林とユネスコエコパーク」、「共生と多様性の森」をテーマに発表が行われ、全体討議が行われました。

第1回開催地の宮崎県綾町からは、照葉樹林の保全や有機農業の取り組みが紹介されるなど、森の恵みが支える地域の豊かな発展や照葉樹林の不思議をテーマに多くの方々が発表、討議を行ない、第2回国際照葉樹林サミット宣言を採択し終了しました。

当センターでは国有林の保護林制度が来年100周年を迎えることもあり、サミット会場に照葉樹林を中心とした保護林の写真パネルを展示し、国有林の取り組みを多くの参加者に紹介しました。

●第1回屋久島世界遺産地域科学委員会およびヤクシカワーキンググループ

（平成26年10月25日～26日）

屋久島環境文化村センターにおいて、屋久島世界遺産地域科学委員会およびヤクシカワーキンググループが開かれました。科学委員会は世界遺産に登録された屋久島の自然環境を把握し、科学的なデータに基づいた順応的管理に必要な助言を得るため、学識経験者などによる委員会として設定されています。



写真1-2. 挨拶する川端九州森林管理局長

会議に先立ち、川端省三九州森林管理局長から「科学委員会が屋久島世界遺産地域管理計画の策定などに大きな役割を果たしてきたことに感謝申し上げるとともに、現在課題となっている山岳部の利用対策やヤクシカ対策、外来種問題などについて、活発な議論をお願いしたい」とのあいさつがありました。

また、岩川浩一屋久島副町長から「自然環境の保全と観光振興が調和した町づくりを進めるた

めに、入島税や入山料などの新たな財源確保やガイド登録認定制度について検討を進めている。また、昭和55年に登録されたユネスコエコパークの再登録や有害鳥獣捕獲など多くの課題を抱えており、科学委員会の提言に期待を寄せている」とのあいさつがありました。

会議は、①山岳部の利用対策②ヤクシカ対策③調査・モニタリング手法④外来種対策を主な議題として始まりました。

【山岳部の利用対策】

山岳部の利用対策においては本年度から社会科学系の委員が新たに1人加わったこともあり、山岳部利用に関するデータをより一層充実させ、分析を進め、屋久島の山岳部利用のあり方について論議を進めることとなりました。特に、検討体制については、中長期的な課題設定や検討経過の透明性の確保、住民を含めた検討の場の設定などについて多くの意見が出されました。

【ヤクシカ対策】

ヤクシカ対策については、前日に行われた科学委員会のヤクシカワーキンググループと県の特定鳥獣保護管理検討会の委員合同の会議概要が報告され、今後も県が策定を予定している第二種特定鳥獣管理計画と連携して議論を進めることとなりました。

【調査・モニタリング手法】

調査に関しては、環境省が予定している山岳部利用に関する調査について調査項目の追加など多くの意見が出されました。また、九州森林管理局のアブラギリ対策に関する調査や今後予定している駆除試験についても多くの意見が出されました。

そのほか会議では、屋久島町からユネスコエコパークの再登録に向けた取り組みとして緩衝地域や移行地域の検討状況について説明がありました。

最後に、九州地方環境事務所の北橋義明国立公園・保全整備課長から「貴重なご意見を踏まえ、今後も関係行政機関と連携して屋久島の保護管理を進めていきたい。一層のご協力をお願いしたい」とあいさつがあり委員会を終了しました

●第2回屋久島世界遺産地域科学委員会（平成27年2月25日～26日）

鹿児島県庁において、屋久島世界遺産地域科学委員会およびヤクシカワーキンググループが開かれました。

本年度第2回の会議は、①平成26年度モニタリング調査の概要②ヤクシカ対策③屋久島山岳部における利用対策を主な議題として始まりました。

【モニタリング調査の概要】

九州森林管理局からは本年度のモニタリング調査結果について概要報告を行い、環境省からは、平成26年度から27年度にかけて実施する「屋久島世界自然遺産地域における利用の適性化に向けた検討及び利用に関するモニタリング実施業務」について、アンケートを含む調査方法の概要が説明されました。山岳部の利用に関しては、今後予定される地域住民も含めた検討会の立ち上げや検討体制などについて意見が出されました。

【ヤクシカ対策】

ヤクシカ対策については、前日に行われた科学委員会のヤクシカワーキンググループと県の特定鳥獣保護管理検討会の委員合同の会議概要が報告されました。捕獲頭数が今年度まで3年連続



写真1-3. 鹿児島県庁での会議

して4千頭以上となり、依然として減少傾向がうかがえないことから、生息頭数の把握方法や管理手法について議論がなされるとともに、「生態系管理目標（素案）の設定」や平成27年度に策定が予定されている「屋久島地域ヤクシカ管理計画（仮称）」について議論がなされました。

【山岳部の利用対策】

縄文杉周辺の再整備については、代替デッキの設置案や整備方針に関して、景観的な配慮に加えて縄文杉周辺の植生環境など科学的視点も加えるべきとの意見が出されました。

このほか会議では、屋久島町が検討しているガイド登録認定制度やユネスコエコパークの拡張登録申請、入島税等検討会議の概要が紹介されました。

●第1回屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク地域推進協議会（平成26年7月14日）

屋久島町は、第1回屋久島・口永良部島ユネスコエコパーク地域推進協議会を屋久島離島開発総合センターにおいて開催しました。

ユネスコエコパークは現在では、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的に、保護・保全だけでなく、自然と人間社会の共生に重点が置かれています。



写真1-4. エコパークについて検討

【屋久島とユネスコエコパーク】

屋久島は昭和55年にユネスコエコパークに登録されました。当時の登録要件は①保存機能②学術的研究支援機能に重点が置かれ、この機能に応じて「核心地域」と「緩衝地域」にゾーン区分を行いましたが、大部分が世界遺産地域と重なり、世界遺産登録後はユネスコエコパークの存在や役割が希薄となっていたことは否めません。

【新たな基準の設定】

このような中、平成7年にスペインで世界生物圏保存地域会議が開かれ、①保存機能②学術的研究支援機能に加えて、③経済と社会の発展という新たな機能が加わり、「核心地域」と「緩衝地域」に加えて「移行地域」が新たなゾーンとして加わりました。「移行地域」には地域社会や経済発展が図られる居住地域が含まれることとなります。

屋久島においても、新たな基準による再登録が必要となり、この基準を満たさない場合は登録が抹消されることとなります。

【再登録に向けて】

このため屋久島町では、ユネスコエコパークの再登録が、「自然と共に生きる知恵と多様な集落文化がとけあい、人々の営みが循環・持続していくまち」づくりを目指す第一次振興基本計画と合致し、口永良島を含む屋久島町の地域づくりに活かすことができるとして、再登録に向けた第1回の推進協議会をこの度立ち上げたものです。

【多くの関係者が参集】

第1回の推進協議会には、委嘱を受けた地域住民や議会、町内団体、行政機関など幅広い関係者が出席し、今後のスケジュールや課題について協議が行われました。

ユネスコエコパークの再登録を契機に、自然と人間社会が共生する屋久島の発展に向けて真剣な協議がスタートしました。

視察・研修への対応

●韓国の山林庁 視察 （平成26年 4月15日）

韓国の山林庁をはじめとする視察者19人が当センターを訪問しました。朝鮮半島の「白頭大幹（白頭山から智異山に続く1400^キを超える山脈）」は動植物が調和した生態系をなしており、一行はその生態系の保護と地域住民との関わりについて屋久島の事例を参考にすべく、3泊4日の日程で今回屋久島を訪れたものです。

一行は、屋久島の世界自然遺産地域が行政機関と地域住民がどのように関わり管理されているかについて、当センターのほか屋久島環境文化村センターをはじめヤクスギランドや屋久杉自然館などを視察しました。当センターでは前田所長がプロジェクトを用い日本の世界自然遺産の現状、屋久島の取組などについて説明しました。

一行からは、国有林と環境省の関係についてや、世界自然遺産となって課題など多くの質問が寄せられました。

おわりに、視察団を代表し山林庁の黄課長から、協力金の制度やシカネットによる対策など学ぶべきことがたくさんありました。親切な説明ありがとうございましたとお礼の言葉がありました。



写真1-5. 前田所長による説明

●大野城市議会 視察 （平成26年 4月25日）

福岡県大野城市議会議員4人がヤクスギランドの遊歩道施設等を視察しました。大野城市には、市名の由来となった我が国最古の山城「大野城」や「水城（みずき）」の遺跡があります。西暦663年に朝鮮半島の百済が唐・新羅の連合軍に攻められ、百済の支援に向かった日本の軍勢は「白村江」の戦いで大敗し撤退しました。唐・新羅の連合軍が日本へ攻めてくることを恐れた朝廷は、太宰府防衛のために全長1.2kmの土塁からなる水城を築き、大野山全体に朝鮮式山城の大野山城を築いたといわれています。

大野城市ではこの広大な遺跡群をつなぐ遊歩道を検討しており、自然環境に調和した遊歩道整備や地域活性化の取組の参考とするため今回の屋久島訪問となったものです。

当日は突然の豪雨に見舞われましたが、一行はヤクスギランドの50分コースをつぶさに観察し、遊歩道の支柱にも木材が使われるなど、自然と調和した木道となっていることに感じ入っていたようでした。



写真1-6. 市議会議員一行

●タスマニア保全活動 ヤクタネゴヨウ採取林視察 （平成26年 5月11日）

オーストラリアのタスマニア州から屋久島を訪れた18人の方々が屋久島町船行に設定されているヤクタネゴヨウ採取林を視察しました。タスマニアには世界遺産（複合遺産）タスマニア原生地域があります。一行はタスマニア原生地域で保全活動を行っているボランティアとその家族の方々と、世界遺産屋久島の自然と保全活動を視察したく今回の訪問となったものです。

現地では保全センターの前田所長が屋久島における国有林の取組について説明。また、ヤクタネゴヨウ調査隊の手塚賢至・田津子ご夫妻がヤクタネゴヨウの希少性・調査隊のこれまでの取組

やマツノザイセンチュウがもたらす被害などについて説明を行いました。屋久島在住のステーブン・ベル氏は、マツノザイセンチュウなど専門用語の通訳に苦慮されていましたが、タスマニアで実際に保全活動を行っている人々の理解は早く、短時間ではありましたが、希少種ヤクタネゴヨウの保全活動の一端を理解していただけたのではないかと思います。

最後に行方からヤクタネゴヨウ調査隊の保全活動に役立てて欲しいと寄付の申し出があり、その場で手塚氏に贈呈されました。



写真1-7. ヤクタネゴヨウの前で記念撮影

●サモアの研修生来訪 (平成26年5月20日)

サモア独立国の研修生3人の訪問を受け、屋久島における森林の保全活動について当センターの前田所長が説明を行いました。サモア独立国はニュージーランドの北2300^キに位置する南太平洋の島国です。研修生は外務省無償資金協力事業としてアジア航測会社が実施している「森林保全計画」技術支援の研修生でサモア独立国で環境保護や森林計画を担う行政職の方々です。

前田所長は日本の世界自然遺産や屋久島における保全活動についてパネルやプロジェクタで紹介しました。

サモア独立国では世界遺産登録を目指しており、「世界遺産登録に向けて林野庁でどのような取り組みを行ったのか？」など多くの質問が寄せられました。

研修生の尽力によりサモア独立国での世界遺産登録が実現することが期待されます。

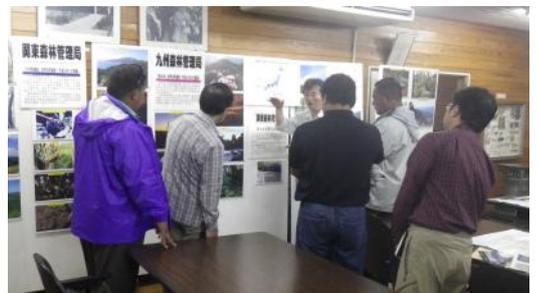


写真1-8. 前田所長による説明

●韓国研究者 視察 (平成26年12月10日)

韓国西南に位置する済州島にハルラサン(漢拏山)を中心とした済州世界自然遺産登録地があります。この地で世界自然遺産地域に関する研究を行っているハルラサン研究院の一行5人が当センターを来訪しました。一行は長期生態系モニタリング調査に関心を持っており「屋久島世界自然遺産地域の視察」に合わせて当センターを訪問したものです。

当日は屋久島森林管理署と屋久島森林生態系保全センターが対応。樋口浩署長から屋久島の植生について地史的特性や気象条件など、氷河期まで遡った解説が行われました。

意見交換では、済州島においてもマツクイムシ被害に悩まされており、屋久島ではどのような防除対策が行われているかなどの質問が出されました。

世界自然遺産地域で仕事を行うもの同士として共通する課題もあり、短い時間でしたが、有意義な意見交換となりました。



写真1-9. 樋口署長による説明

●台湾調査団 視察 （平成26年12月16日）

台湾国家発展委員会の離島観光調査団の一行6人が当センターを来訪しました。台湾国家発展委員会は台湾における経済政策の司令塔として、経済や社会、産業、人的資源の発展などの政策立案を行う重要な組織で、今回は離島観光に関する調査を主目的に来島したものです。当調査団は、森林生態系の保全についても高い関心をもたれており今回当センターへの訪問となったものです。



写真1-10. 台湾調査団の一行

一行は屋久島観光協会の榎光徳事務局長の案内で当センターを訪れ前田所長から業務概要について説明を受け、その後意見交換に入りました。

意見交換は、森林資源の把握方法に関する技術的な話から林野庁と環境省の役割分担などの行政関係の話題など、多岐にわたりました。

●広島大学院生 調査 （平成27年2月27日）

広島大学からの依頼を受け、同大学院生5人に教授と通訳を含めた7人を受け入れました。同院生はインドネシア、ラオス、ベトナム、ナイジェリア、日本と国際色はさまざまです。一行が学んでいる総合科学研究科では現在、観光と地域の発展について研究がなされており、「広島大学科学研究科21世紀プロジェクト」の一環として今回、屋久島で2009年から進めている「エコツーリズムと観光産業の持続可能な発展」について調査に訪れたものです。



写真1-11. 広島大学大学院生一行

当日は当センター2階において「屋久島における国有林の管理と森林保全の取り組み」についてプロジェクトを使用して猪島生態系管理指導官が説明を行いました。

はじめに、屋久島が世界自然遺産に登録された経緯、屋久島の国有林の状況や植物の垂直分布の特徴について説明。続いてモニタリング調査や樹勢回復・樹勢診断措置、巡視活動、広報活動など当センターの保全に関する取り組みについて紹介しました。

研修生からは、当センターの財源についてや、現在直面している課題など多くの質問が寄せられました。

2. 入林・保護林内調査等の手続き状況

入林・保護林内調査の手続き状況

国有林内へ入林される場合（調査研究、撮影及び取材等）は、入林申請手続きの内容（目的、場所、期間等）に基づき、国有林の管理経営上の支障について確認のうえで、入林等について許可を行っています。

特に、調査研究等の場所が森林生態系保護地域内の場合は、保護林調査申請書の提出。また、植物等採取を行う場合は、環境省や文化庁等の許可書（保安林の場合は県知事）等の写しを添付のうえ、植物等採取申請書の提出をお願いしています。

●26年度の入林申請件数	165件	●26年度入林届件数	10件
① 調査研究	61件	屋久島町役場	5件
② 撮影	51件	環境省	1件
③ 測量関連	11件	屋久島町警察	1件
④ その他	42件	鹿児島県熊毛支庁	3件

(1) 植物関係

代表者所属	入林目的
屋久島生物多様性保全協議会	ヤクタネゴヨウ及び絶滅危惧植物調査、及び大気汚染調査とモニタリング
鹿児島大学 理学研究科	屋久島の森林動態調査
香川大学教育学部	屋久島固有植物群の遺伝学的及び生態学的研究/屋久島のシダ植物の生態学的調査
(一社)日本森林技術協会 事業部 森林保全グループ	調査・研究「平成26年度屋久島世界遺産地域等における森林生態系に関するモニタリング調査に係る業務」
神戸大学 農学研究科	ヤクスギの樹上生態系に関する学術調査
東京大学大学院 新領域創成科学研究所	ヤクタネゴヨウの根に共生する外生菌根菌を調査
株式会社自然環境研究所 野生動物保護管理室	平成26年度 保護林モニタリング調査等業務
首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻	ベニシダ類の分類学的研究のための現地調査とサンプル採取
広島大学大学院 国際協力研究科	ヤシ科植物ビロウの遺伝解析用葉サンプルの採集
大阪市立自然史博物館	ヤクシマママコナのDNA・形態測定用サンプル採取および防花昆虫調査
京都工芸繊維大学	学術研究のため。屋久島地域に見られるシダ植物とその葉の形態の調査
北海道大学大学院 地球環境科学研究院	研究用樹冠アクセスタワー(西部林道川原)での樹木シュート伸長に関する研究の予備観察調査および研究環境点検

代表者所属	入林目的
東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻	屋久島で形態・生態的に多様化を遂げたキク科アキノキノソウ属植物の進化プロセスを解明するために、現地調査と遺伝解析用試料の採取
京都大学霊長類研究所	果実をめぐる植物と動物の相互作用の調査
独立行政法人森林総合研究所九州支所 森林生態系グループ	西部照葉樹林4haプロット実生センサス調査
日本蘚苔類学会会員・ 鹿児島県希少動植物保護推進委員	ヤクスギランドでのエコツアーに利用するため、ヤクスギランド内の蘚苔類フローラ調査を行い、蘚苔類チェックリストを作成する。 ヤクスギランド内の蘚苔類に関するコケMAP等の出版物を作成する。

(2) 動物関係

代表者所属	入林目的
北海道大学 和歌山研究林	学術研究:ヤクシカの個体群動態とシカ柵内外の森林植生比較
京都大学大学院 理学研究科	西部低地林に生息するヤクシマザルの社会関係と行動の研究
九州大学 システム生命科学府 生態科学研究室	ヤクシカの調査および植生のトランセクト調査
京都大学 霊長類研究所	ニホンザルの生態・行動調査および植生調査/ニホンザルが土壤真菌相に与える影響の調査/ニホンザル・シカ・ヒルの個体調査
琉球大学 熱帯生物圏研究センター	ヤクシマザルの移動生態学および睡眠研究
屋久島生物部事務局	ヤクシカ ライトカウントモニタリング調査(動態把握の為)/糞塊調査(密度把握の為)
慶應義塾大学先端生命科学研究所	シカの食性と腸内細菌叢に関する調査
京都大学大学院 人間・環境学研究科	小楊子川右俣上流域における両生類相の調査
八千代エンジニアリング株式会社 九州支店環境部	環境省による「屋久島国立公園におけるヤクシカ保護管理対策推進業務」の調査 ①屋久島全域のシカ個体数の増減の把握を目的とした個体数密度調査(糞塊法、糞粒法) ②シカに対する植生保護柵の効果の検証を目的とした植生調査 ③保護地域における管理捕獲手法の検討を目的とした調査・試験
中京大学国際教養部	①屋久島西部地域のニホンザルの糞中種子に集まる生物を明らかにする ②2次散布者が、糞中種子の持ち去りにどの程度影響するかを推定する ③2次散布者の活動時期を明らかにする
岩切環境技研株式会社 技術部	九州(南部)・沖縄地方におけるニホンジカ及びイノシシの生息状況等調査業務
鹿児島県環境林務部 自然保護課	ニホンジカの生息密度と林木被害の動向を調査するため。
鹿児島大学農学部 防砂利・森林水文学研究室	土面川流域の深層崩壊地の地形・地質調査

(3) 昆虫・鳥類ほか

代表者所属	入林目的
尾上 和久	鳥類標識調査
鹿児島県昆虫同好会	昆虫採集
久保田 義則	昆虫生態調査、採集
公益財団法人 山階鳥類研究所	鳥類の捕獲調査
京都大学 野生動物研究センター	屋久島における森林環境とコウモリ類生息分布の関連ならびに、一部の種の個体関係の調査
愛知県立新川高等学校	タマムシ、雑虫の分布及び生態調査
滋賀県立大学大学院 環境科学研究科	訪花昆虫相(特にハナアブ類について)の調査
(一社)日本技術協会 事業部 森林保全グループ	調査・研究「野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査(屋久島地域)業務」のため
国立科学博物館 動物研究部 陸上無脊椎動物研究グループ	屋久島における昆虫類の多様性調査

(4) その他

代表者所属	入林目的
総合研究大学院大学日本文化研究専攻 (国立歴史民俗博物館)	歴博共同研究「保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響 ―持続可能な地域発展における規制のあり方―」の一環として実施される現地視察・屋久島国有林野内に現存する文化・歴史的遺構確認調査
	総合研究大学院大学日本文化研究専攻(国立歴史民俗博物館)の大学院集中講義「日本歴史研究の方法B-地域研究の方法-」における屋久島演習実施のため
鹿児島県農業開発総合センター	酸性雨モニタリング(土壌・植生)調査
公益財団法人自然保護協会	屋久島原生自然環境保全地域における気象データロガーのメンテナンス及び補植調査
株式会社 アジア技術コンサルタント	紀元杉バリアフリー遊歩道新設工事整備事業に伴う測量調査業務
株式会社 南日本技術コンサルタンツ	縄文杉を展望する施設(木製展望デッキ)を設置するための調査及び測量
大阪工業大学工学部環境工学科	屋久島渓流水質調査
熊本県森林組合連合会	平成26年度 屋久島国立公園植生保護柵測量を実施するため
一般財団法人鹿児島県環境技術協会 環境生物部	鹿児島県事業「平成26年度道路整備(交付金)環境調査委託(荒川下工区)」にともなう道路沿線周辺の植物調査
(独)産業技術総合研究所 地質情報研究部門	地殻表層における元素広域分布図を作成するための対象試料である川砂を採取

3. 保護林調査 報告書

(1) 平成26年度報告書リスト

入林目的	報告者
ヤクシカの個体群動態とシカ柵内外の森林植生比較	揚妻 直樹
西部低地林に生息するヤクシマザルの社会関係と行動の研究	島 悠希
屋久島の哺乳類の糞虫DNAを用いた食物分析	辛島 司郎
鳥類の捕獲調査	浅井 芝樹
タマムシ、雑虫の分布及び生態調査	石黒 昌貴
環境省による「屋久島国立公園におけるヤクシカ保護管理対策推進業務」において調査を行うため。	飯島 康夫
小楊枝川及び大川上流域における両生類相の調査	西川 完途
ヤクスギランドでのエコツアーに利用するため、ヤクスギランド内の蘚苔類フローラ調査を行い、蘚苔類チェックリストを作成する。 ヤクスギランド内の蘚苔類に関するコケMAP等の出版物を作成する。	林田 信明
ニホンザルによるキノコ食の調査随行のため	都野 展子

(2) 平成26年度成果品リスト

報告書名(成果品)	報告者
屋久島におけるアサギマダラのマーキング調査(14)(15)	久保田 義則
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2013年屋久島における迷蝶記録 ・ 屋久島のキョウチクトウスズメ ・ アサギマダラのヤドリバエからウジ ・ ヤクシマエンマコガネの生息状況 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本産アサヒナルリナガタマムシについて ・ クロチビタマムシの大阪府からの記録と飼育下における生態的知見 	栗原 隆・石黒 昌貴・ 栗原 桂一
屋久島国有林内におけるママコナ属および訪花昆虫調査結果について	長谷川 匡弘
Leaf internal anatomy of Japanese fern species and its effect on photosynthesis traits	西田 圭祐
「屋久島国立公園におけるヤクシカ保護管理対策推進業務」においての調査	飯島 康夫
ヤクシカの栄養状態に対する密度・性・胃内容物・環境要因の影響－腎脂肪指数による評価－	黒岩 亜梨花

報告書名(成果品)	報告者
<i>Dryopteris protobissetiana</i> (Dryopteridaceae), a New Diploid Sexual Species of the <i>Dryopteris varia</i> Complex (Subg. <i>Erythrovariae</i> , Sect. <i>Variae</i>) from Yakushima, Kagoshima, Japan	Kiyotaka Hori・Atsushi Ebihara・Narumi Nakato and Noriaki Murakami
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2013年度ヤクシカモニタリング 調査報告書-屋久島のシカ動態把握のために- ・ ヤクシマダケ草原におけるヤクシカの生息密度推定 ・ ヤクシカの牧場利用と利用個体の密度に影響する要因の把握 ・ Invasion of Yakushima Island, Japan, by the Subtropical Lizard <i>Japalura polygonata polygonata</i> (Squamata: Agamidae) 	川村 貴志・幸田 良介・城野 哲平・立澤史朗
Phylogeography of a rare orchid, <i>Vexillabium yakushimense</i> : comparison of populations in central Honsyu and the Nansei Island chain, Japan	Ikuyo Saeki・Asako Kitazawa・Atsushi Abe・Koya Minemoto・Fumito Koike
屋久島における河川水の窒素動態について	中間 悠輔
2014年夏期ヤクシマザル調査報告	2014ヤクザル調査隊
急勾配河川の清流土砂移動機構に関する研究 -屋久島の河川を例として- Mechanism of bed load transport in a steep Channel -A case study of rivers in Yakushima Island-	勝村 昌央
越境大気汚染物質が西南日本の森林生態系に及ぼす影響の評価と予測	独立行政法人 森林総合研究所
屋久島北東部の完新世海変動から見た鬼界カルデラ噴火津波痕跡についての一考察	七山太(産総研)・前野深(東大・地震研)・中川正二郎・佐々木洋之・面将道(屋久島町)・下司信夫・渡辺和明(産総研)・成尾英仁(武岡台高校)・小林哲夫(鹿児島大・理)
屋久島北東部,小瀬田海岸に認められる4段の完新世波食ベンチと歴史津波?痕跡<速報>	中川正二郎・佐々木洋之・面将道(屋久島町)・七山太・下司信夫・渡辺和明(産総研・地質)・成尾英仁(武岡台高校)・前野深(東大・地震研)・小林哲夫(鹿児島大・理)
2013年度京都大学野生動物研究センター年報	京都大学野生動物研究センター
平成24・25年度屋久島世界遺産地域における森林動態モニタリング調査業務報告書	公益財団法人日本自然保護協会
定点・定期の長期観測に基づく酸性降下物が屋久島渓流水質におよぼす影響の評価	駒井 幸雄

4. 広報活動

(1) 保全センター広報誌「洋上アルプス」の作成

作成の趣旨

保全センターの業務の紹介や活動報告、屋久島の雨量観測データなどの情報を提供することにより地元施設や関係機関との密接な連携を図っています。また、屋久島の生態、森林の役割、自然と人との共生のあり方などに関する普及啓発を行うとともに、屋久島世界自然遺産地域内での保全活動を紹介し、広く一般の理解と協力を深めるために作成しています。

発行日

毎月5日に発行、1回発行部数 約1,000部

掲載記事

-
- No.229 ◇公的機能維持増進協定を締結～民・国連携し森林の公益的機能増進に努める～
(4月) ◇縄文杉デッキの現地検討会を実施
◇平成26年度業務予定
◇クリーン活動
◇屋久島森林生態系保全センター 人の動き
[屋久島生態系モニタリング]屋久島北部の植生垂直分布調査(平成22年度調査)標高900mプロット
[屋久島の植物]アカシデ(カバノキ科)
-
- No.230 ◇韓国の山林庁職員 屋久島を訪ねる
(5月) ◇福岡県大野市議長がヤクスギランドを視察
◇今、再び屋久島の地で 屋久島森林管理署長 樋口 浩
◇瀬切川流域の照葉樹林とヤクタネゴヨウの巨木の森を訪ねる『第2回国際照葉樹林サミットin屋久島』プレイベントのお知らせ
[屋久島生態系モニタリング]屋久島北部の植生垂直分布調査(平成22年度調査)標高1000mプロット
[屋久島の植物]ウラジロエノキ(アサ科)
-
- No.231 ◇ヤクタネゴヨウの巨木を訪ねる～第2回国際照葉樹林サミットin屋久島プレイベント～
(6月) ◇「シャクナゲパトロール」開始～登山者へ安全など呼びかける～
◇オーストラリアからの一行 ヤクタネゴヨウ採取林を視察
◇GW期間中における縄文杉登山者数と自然休養林入林者数
[屋久島生態系モニタリング]屋久島北部の植生垂直分布調査(平成22年度調査)標高1250mプロット
[屋久島の植物]ヤマモモ(ヤマモモ科)
-
- No.232 ◇第2回国際照葉樹林サミットin屋久島
(7月) ◇「モーターカーによる救助活動」農林水産大臣賞を受賞
◇サモアの研修生が保全センターを来訪
◇屋久高1年80人が！「岳詣り」登山へ～センター職員が事前学習の指導へ～
◇国民の祝日として『山の日』が制定
[屋久島生態系モニタリング]屋久島北部の植生垂直分布調査(平成22年度調査)標高1350mプロット
[屋久島の植物]ヤクシマカラスザンショウ(ミカン科)
-
- No.233 ◇ユネスコエコパークへの再登録に向けて～第1回推進協議会開催～
(8月) ◇夏山の森林パトロール開始～登山者へ安全など呼びかける～
◇雨量データ 平成23年～25年
[屋久島生態系モニタリング]屋久島北部の植生垂直分布調査(平成22年度調査)標高1400mプロット
[屋久島の植物]ヤクシマカラマツ(キンポウゲ科)
-
- No.234 ◇夏休み親子森林教室～親子で巨木の森を散策～
(9月) ◇夏休み期間の縄文杉登山者数と自然休養林入場者数
[屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高200mプロット
[屋久島の植物]バクチノキ(バラ科)
-

No.235 ◇外来種アブラギリの不思議
 (10月) ◇屋久島森林生態系保護地域などにおける学術調査等の入林状況
 平成26年4月1日から平成26年9月30日 ー植物・動物ー
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高400mプロット
 [屋久島の植物]カンコノキ(ミカンソウ科)

No.236 ◇第1回世界遺産地域科学委員会
 (11月) ◇屋久島森林生態系保護地域などにおける学術調査等の入林状況
 平成26年4月1日から平成26年9月30日 ー昆虫・鳥類ほか・その他ー
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高600mプロット
 [屋久島の植物]コハウチワカエデ(ムクロジ科)

No.237 ◇大分舞鶴高校体験学習生を受入
 (12月) ◇『ボランティア活動』に汗
 ◇【屋久島レクリエーションの森】作文コンクール入選作品紹介
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高800mプロット
 [屋久島の植物]クロガネモチ(モチノキ科)

No.238 ◇念頭所感
 (1月) ◇韓国研究者の視察
 ◇台湾調査団が訪問
 ◇昨年の主な取組
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高1000mプロット
 [屋久島の植物]ハゼノキ(ウルシ科)

No.239 ◇冬山の表情
 (2月) ◇国有林モニターの募集
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島東部の植生垂直分布調査(平成23年度調査)標高1200mプロット
 [屋久島の植物]ガジュマル(クワ科)

No.240 ◇第2回世界遺産地域科学委員会
 (3月) ◇生物多様性4つの危機とシカ対策について考える
 ◇広島大学大学院生調査～エコツーリズムと観光の発展について学ぶ～
 [屋久島生態系モニタリング]屋久島中央部の植生垂直分布調査(平成24年度調査)No.1プロット(標高1200m地点 大王杉付近)
 [屋久島の植物]ヤシャブシ(カバノキ科)



(2) 「手作り図鑑」作成

屋久島の樹木214種を紹介したこの図鑑は、当センターの職員がこれまでに撮りためた写真をもとに作成した手作りの図鑑です。

森林生態系の現状を知るために、どのような植物がどのように分布しているかを把握する必要があります。特に樹木の見分け方にポイントを置き、木々をあまり知らない人でも見分け方の手がかりが掴めるよう工夫しました。



(3) ホームページ「保全センター紹介」の更新

インターネット上に掲載されている九州森林管理局ホームページの「保全センター紹介」を更新しています。

紹介の趣旨

「保全センター設置の目的」「組織図」「主な業務内容」「業務計画及び実績」等を写真入りで紹介しています。屋久島自然遺産地域内での保全活動状況に広く一般の理解と協力を得るために行っています。

アドレス

http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/

平成27年10月

九州森林管理局 屋久島森林生態系保全センター

〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL 0997-42-0331 FAX 0997-42-0333